

# industria

## 社員インタビュー

2024年8月

industria

テクノロジー  
濱本 拓実

industriaのDNAから  
生まれたFILSTAR秘話

### ■お客様や社会のニーズに基づきバージョンアップする

——仕事内容が「自社製品の開発・改良」とのことですが、具体的にはどのような開発・改良なのでしょう。

私の場合、ゼロから開発するというよりは、今あるものを改良する機会が多いです。

具体的には、「バージョンアップ」と言って、完全に物を変えるというよりも、現状の性能を上げる方向の開発ですね。最近で言うと、これまでのフィルスターでは、結構、力が強いポンプを使わないといけなかったんですが、力の弱いポンプでも使えるように改良しました。

——その改良（バージョンアップ）のニーズや目的というのは、ということなのでしょうか。

力の強いポンプだと、たくさんの電気を使うことになりますよね。でも、弱いポンプだと少ない電力で済みます。ですから、環境問題が叫ばれる中で、消費電力を下げるとというのが目標ですね。それは、社会のニーズであると同時に、お客さんのニーズでもあります。

### ■学生時代の趣味を通じて、自分で分析して、考えて、行動に移すプロセスを学んだ

——なるほど、分かりました。では、続いて、入社前の学生時代のことを教えてください。学生時代には、写真と車に夢中になった、とありますが、それが今の仕事に役立っている点はあるですか。

そうですね。写真の撮影にしても、サーキットで車を走らせることにしても、自分の行動したことに対して、出た結果を分析して、自分なりに考えて、次の行動に移す、という工程があるのですが、そのプロセスを行うということは身についたんじゃないかなと思います。

たとえば、写真だったら、自分が撮った写真とプロが撮った写真を見比べて、何が違うのだろうと分析します。それは写真の撮り方が違うのか、撮った後の編集ソフトの使い方が違うのかというような視点から、確実にレベルアップできるように分析して、新しい方法を見つけて、それを試して…、ということをするんですね。そういう、分析して改良して試して、また分析して、ということを繰り返しながらステップアップしていくというのは、今の開発業務でもすごく役に立っているなと思います。あと、車については、いま、テスト機の組み立てなどで、工具を使って機械の加工をする機会がありますが、昔から車の整備などを自分でやっていたので、工具の使い方などは役立っていますね。

——学校では工学部のような技術系だったんですか。

私はちょっと変わっていて、高校は理系の高校で、大学は経済学部で文系でした。理系というのは理論に基づいた考え方をベースにします。一方、文系はできるだけ多角的な視野から考えるんじゃないかなと思うんですね。

だから、——これは自分で言うのはちょっと恥ずかしいんですが、——自分はその両方を持ち合わせているのかな、って思いますね（笑）。いまは、自分の興味のあることを仕事にできているので、楽しいですね。



バージョンアップを行う  
エレメントレスフィルターFILSTAR



## ■未知の領域を開発している面白さ

——では次に、入社後の仕事についておうかがいします。一番夢中になったこととして、「フィルスターの開発」を挙げられています。どういうところに夢中になったのでしょうか。

そうですね。やはり、試作品を作って実験して、それでダメだったら改良して、また実験して、ということを繰り返しながらちよつとずつレベルアップしていくというところが夢中になりますね。自分の考えを行動に移して結果が得られるというところが、すごく楽しいです。

——それは、ものづくり全般に言えることですよ。フィルスターだからこそその面白さというのは、どういう点にあるのでしょうか。

フィルスターって、基本的には、液体と固体を分離する技術なんですけど、液体と固体（固形物）の分離を主にやっている会社というのは、世界中でもあまりないんですね。また、その理論も確立していないんです。だから、未知の領域を開発しているという面白さはありますね。同じ流体の分離技術でも、空気（気体）と固形物（固体）を分ける技術というのは、サイクロン掃除機を始めとして、世界中でも開発が進んでいるんです。でも、基本的な考え方は一緒なんですけど、流体が空気ではなくて液体になると話は変わってきて、その分野での開発は世界的に見ても進んでいないんですよ。その分、難しさはありますけどね。

## ■インダストリアでは、何でもできる「マルチエンジニア」が求められている

——なるほど、そうなんですね。入社してすぐにフィルスターの開発部署に配属されたということですが、その時はどのような気持ちでしたか。

就活時の面接では開発部署を希望していましたが、開発の仕事は理系学部出身者がするものだろうと思っていたので、自分は他の仕事を担当するんだろうな、って思っていました。だから、フィルスターの開発部署に配属された時は、正直、意外で嬉しかったですね。こんな大きな仕事がやれるんだ、という楽しみな気持ちが大きかったです。いま3年目ですが、その気持ちはいまでも変わりません。

——一方で、この3年間で大変だったこととして、「試作品の設計からお客様対応まで、ほぼ全てを行ったこと」をありますが、これは具体的にはどういうことだったのでしょうか。

そうですね。やはり、とくにお客様対応は、何か問題があると直接会社の信頼につながってしまうので、慎重になりますね。私自身、自分から営業的な話をしたりするのが得意な方ではないので、結構難しいな、というか、まだ、どうすればいいのか正解が見つかっていない状況です。

とは言え、会社の方針としても、インダストリアの社員は何でもできる「マルチエンジニア」が求められているので、何でもできないといけません。3年たって、最初の頃よりは近づいてきているとは思いますが。

## ■「テクノロジーはNG禁止」の意味

——これまでの仕事の中で忘れられない言葉として、新入社員研修の時に言われた「テクノロジーはNG禁止」という言葉を挙げていますが、これは、どういう意味の言葉で、どういう意味で忘れられないのでしょうか。

この言葉は、入社時に福田さんから言われた言葉なのですが、「難しいことでも、最初から『できない』と言うのではなく、とりあえずやってみる」「できない、やらない、は禁止」ということです。

最初に聞いた時は、難しそうだな、と思いました。同時に、楽しそうだな、とも思い、やってやるぞ、という気持ちになったことを憶えています。

——それから3年たって、この言葉の意味は、濱本さん自身にとって、変わりましたか。同じですか。

そうですね。開発部門の仕事には、試作品の図面を書く場面が多いんですが、その時には、いろいろ多方面の知識が必要になります。誰かに図面を書いてもらう時にも、「こういう風にしたい」という提案ができないといけません。そのためにも、メカ的な強度などの側面はもちろんのこと、「お客様はきつとこうするだろうな」という営業目線での知識など、いろいろな知識が必要です。

だから、「テクノロジーはNG禁止」という言葉は、単純に人数が少ないから何でもやらないといけない、ということではなくて、何でもいろいろな経験を積んで、いろいろな知識を身につけて、そして良い製品を生み出してほしい、という意味だったんだな、といまは思いますね。

## ■チャレンジすることから学んだ、信頼関係の大切さ

——「チャレンジすることが楽しい」と書かれていますが、最近、チャレンジして楽しかった出来事はありますか。

去年のことなんですけど、あるお客様から委託テストの依頼をいただいたんです。まず、最初の段階は、お客様の機械を弊社に持ち込んでテストをしたんですね。そして、その結果をお客様に出したら、その結果に満足をいただいて、今度は、第2弾として、お客様の会社の設備を使ってやろう、ということになったんです。そこから2か月間、週4日、ほぼ毎日お客様のところに通ってテストしたんです。

お客様の会社ですから、当然、お客様対応を直接しながら、テストや装置の改良をするわけで、その時は、自分としても新しい経験であり、学ぶことが多かったですね。

——そこでは、どういうことを学びましたか。

当たり前のことかもしれませんが、信頼関係を築くことの重要性を実感しました。この時は、まず最初に弊社でテストをして満足いただき、少し、信頼していただいたわけです。そして、次に、今度はお客様のところに行って、さらに、その信頼を膨らませたという感じです。

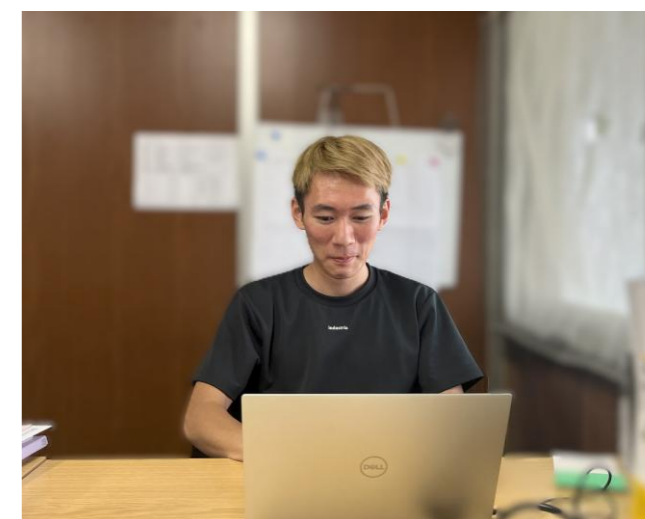
お客様の工場で「ここはどうしたらいいかな」と質問してくれたり、自分が改良した装置について「ありがとう」と感謝の言葉をいただいたりする中で、徐々に「信頼」が生まれてきたことを実感できました。信頼って、最初からあるわけではなくて、少しずつ大きくしていくものなんだった。

——好きな言葉として「不撓不屈」を挙げられていて、「どんな困難にも立ち向かっていくこと」を信念にしているということですが、これまでの仕事の中で、立ち向かった困難には、どういったことがありますか。

やはり、フィルスターの開発で試作品を作って、何度実験しても良い結果が出ない時などは、「困難さ」を感じますね。お客様に対する結果レポートの納期に間に合わせる必要もありますから、1日中、実験を繰り返す時など、大変です。

——そういう困難に立ち向かい、それを乗り越えようとするエネルギーの源みたいなものは、何なんでしょう。

もともと、学生時代の車のレースでもそうだったんですが、「負けたままでは終われない」という気持ちが強いんじゃないかなと思います。自分がやったことに対しては、最後までやりたい、やりきる、そういう性格なんだろうね。





## ■人に貢献し、社会を変える「ものづくり」とは

——「ものづくりとは？」という質問に対して、「人に貢献できる」「社会を変えられる」と書かれています。濱本さんにとって、「人に貢献する」「社会を変える」というのは、具体的にはどのようなことなのでしょう。

「人に貢献する」ということについては、やはり、社長のビジョンでもある「アフリカに住む人たちに綺麗な水を提供する」というのが、大きな貢献だと思います。

また、「社会を変える」ということについては、消費電力が少ないフィルスターを開発するというのは、1つの会社だけでは小さな変化かもしれないけれど、それを多くの会社がやってくれば、社会の大きな変化につながると思うんです。社会全体をカーボンニュートラルにして、社会全体の無駄を無くすことができたらいいなと思います。

## ■インダストリアの魅力は、「独自性」と「温かさ」

——濱本さんにとっての会社のイメージは、「ハンマーヘッドシャーク」なんですね（笑）。これはどういうイメージなのでしょう。



ハンマーヘッドシャーク

うちの会社は「独自性」とか「オンリーワン」というところが、会社の方針だと思います。福田さんもよく、「うちの会社は、他の会社と競ってナンバーワンを目指すのではなく、他のどこにもないオンリーワンの存在を目指すんだ」と言っています。世の中のどこにでもあるような会社になるんじゃなくて、独自路線に行く、というのが「ハンマーヘッドシャーク」に似ているんじゃないか、と思ったんです。

実際、働いていても、あまり他の会社に倣ったりするのではなく、インダストリアはインダストリアだぞ、という雰囲気を感じますね。社長も、「その金髪、いいね」と言ってくれますし（笑）。

——一方で、インダストリアという会社の魅力として「人の温かさ」「アットホーム」を挙げられ、会社のDNAとして「人が困っていたら助け合う」と言われています。これは、どういうことですか。

これは、働いていて、素直に感じる事なんです。たとえば、ほんとに単純なことなんです。自分が「長いホースをどうやって巻けばいいんだろう」って困っていると、頼んでもいないのに、ベテランの方が「こうやるんだよ」と教えてくれたり、初めての試作品の設計で困っていると、「こうしたらいいんじゃないかな」と助けてくださったり。

そういうのは、毎日のようにあります。部署を問わず、常に相談に乗りやすい環境・雰囲気、人の温かみがすごくありますね。

——そういう雰囲気は、なぜあるんだと思いますか。

うーん、単純に従業員同士の仲が良いからかもしれませんね。

あと感じるのは、社長や役員、部長の方々が、皆、「最近、どう？」みたいに、日常からフランクに話しかけてくれる、というのもあるのかな。壁を作らずにフランクに接してくださるので、そういう雰囲気が現場にも浸透しているからなんだと思います。

——なるほど。「壁を作らない」というのは、さきほどの「テクノロジーはNG禁止」の時に言った、「限界を作らない」とも、どこか結びついているんですかね。

なるほど、そうかもしれませんね。「『できない』という雰囲気を無くす」というのと、「壁を無くす」というのは、もしかしたら、どこかでつながっているのかもしれないですね。

「壁を無くす」ことで、世の中に無いもの、あるいは、限界があると思われていたものを超えて、新しい製品を開発する、というのは、インダストリアのDNAかもしれないです。

考えてみれば、自分も3年目になったので、部下たちにも「会社が楽しい」と思ってもらえるように、壁を作らないでフランクに接することは、日頃から自然と心がけています。



## ■製品の性能の良さだけでなく、自分のレスポンスの良さでも納得いただく

——フィルスターの魅力・アピールポイントの欄に、「お客様に納得して購入いただいている」と書かれています。この「納得」というのは、お客様はどのように「納得」しているんだと思われますか。

自分は営業担当ではないので、直接お客様に製品を売ったという経験はないのですが、購入いただくまでの経緯の中で、お客様のサンプルを自分が分析して、結果レポートを書いて、それに満足いただいて、購入いただいた、という経験はあります。

その中では、もちろん分析結果の良さもあるのですが、結果レポートのレスポンスの良さとか分かりやすさというのも、お客様の満足とか納得にはつながったと思います。

ですから、性能面とレスポンスの良さの両面で納得いただき、購入いただけた時は、自分がやって良かったな、と思いますね。

## ■実験がうまくいくと、家の水の音も美しく聞こえる

——逆に、実験が上手くいかず、良い結果が出ない時は、家で水の音を聞くもの嫌になったそうですね。

何回実験をやってもうまくいかない時は、もう、一日中実験をやり過ぎて、頭が一杯々々になってしまうこともあります。そういう時は、家に帰っても仕事のこと考えてしまい、それこそ、水の音を聞くと、うまくいかない実験がフラッシュバックしてしまいますね。

逆に、実験がうまくいっている時は、水の流れたか音とかが「なんて美しいんだろう」って思うんですよ（笑）。

## ■小さな装置を使って、大きな開発をしたい

——では、そろそろ最後の質問になるんですが、濱本さん自身の夢として「社会に貢献すること」「社会を変えること」とありますが、いまは、具体的にどのようなことを実現したいと思っていますか。

やっぱり、装置の消費電力を減らすことで地球環境に貢献するとか、一見すると、難しくて無理なんじゃないかと思われることを、インダストリアの製品で変えていくようなことをしたいですね。

インダストリアは小さい会社だし、フィルスターは小さい製品だけれども、それが誰もやらない大きなことをやったら、カッコいいじゃないですか。小さいってことは、環境への負荷が少ないということでもありますし。

——その夢は、いま何パーセントくらい実現できていると思いますか。

まだ20パーセントくらいでしょうか。もっともっと良いものを作ってお客様に実際に使ってもらい、もっと社会に知ってもらわないと、社会は変わらないと思うんですよね。だから、小さな装置を使って大きな開発ができれば、もっともっと環境への負荷を減らし、地球環境にとって良いことができると思っています。